

## ティツィアーノ作《悔悛するマグダラのマリア》の図像源泉 —マントヴァの古代コレクションとの関連について

大熊夏実（京都市京セラ美術館）

ティツィアーノは1531年にマントヴァ公フェデリコ2世の依頼により、ペスカーラ侯爵夫人ヴィットーリア・コロナへの贈り物として「最大限に悲痛な（*lacrimosa più che si può*）」マグダラのマリアの絵画を制作した。本作は、画家がその後40年間にわたって繰り返し描いた同聖女の半身像の最初期作である。この絵画は逸失したと考えられるが、ピッティ宮殿に現存する《悔悛するマグダラのマリア》（c. 1531-35）と類似のものであった可能性が高い。傍らに香油壺を置き暗い岩窟に佇む聖女は、右手を胸にあてて上空を仰ぎ、瞳には強い悔悛の念を示す涙を浮かべる。一方で、衣服の代わりに豊かなブロンドの長髪で覆われた血色の良い豊満な身体は、異教的なまでの官能美をたたえている。

カルロ・リドルフィによるティツィアーノ伝（『美術の驚異』1648年）での言及を発端に、先行研究はしばしば本作の図像源泉を古代彫刻に帰してきた。右手を胸に左腕を下腹部にまわす聖女のポーズは、乳房こそ隠していないものの、「恥じらいのヴィーナス（*Venus Pudica*）」として知られる女神像の一類型と確かに一致する。また、キリストへの献身的愛でもって罪を赦されたマグダラのマリアに、神的な愛の象徴である「天上のヴィーナス」を重ねる新プラトン主義的解釈（Haskins, 2005ほか）は、本作における古代参照の妥当性を強めている。しかし、ローマ訪問（1545-46年）以前のティツィアーノにおける古代美術の参照経緯は不明瞭なままであり、具体的な参照可能作例に関する議論も不十分である。これらを踏まえて本発表では、1520～30年代に画家が度々訪れたマントヴァ宮の古代コレクションとの関連に着目する。

発表ではまず、ティツィアーノによる《マグダラのマリア》の現存するヴァリエーションを概観し、衣服や周辺モチーフ、背景の変更とは対照的な聖女のポーズの一貫性を確認する。また、同聖女の半身像を盛んに描いたジャンピエトリノをはじめとする周辺作例との比較から、同一のポーズによって特徴づけられたティツィアーノの聖女像の独自性を示す。そして、16世紀中葉のイタリアにおける「恥じらいのヴィーナス」像の伝播範囲が限定的であったことを確認した上で、ティツィアーノがマントヴァ宮の古代彫刻を参照した可能性を指摘したい。同地には、ローマから宮廷画家として招聘されたジュリオ・ロマーノにより1526年に寄贈された古代コレクションがあった。当時の文書記録はその詳細を記していないが、17世紀作成の挿図付き目録には数点の「恥じらいのヴィーナス」像が確認できるほか、ジュリオが設計・装飾を手掛けたマントヴァ公の別荘の一室にも同様の女神像が描かれている。

公爵と画家の仲介役を担った文人ピエトロ・アレティーノの介入（D'Elia, 2005）も考慮し、本作を宮廷のネットワークの中に位置づけることで、ティツィアーノの創造におけるマントヴァ滞在の影響の一端を示したい。